京都ミューズ 冬の大合唱例会 2026　ベートーヴェン

太田 弦 指揮・京都市交響楽団　**交響曲第９番《合唱付》**

2026.12.6(日) 14：00 開演

京都コンサートホール 大ホール

ホールで「第九」を聴いてみませんか？

～初演から200年余り。“楽聖”が遺したメッセージをあなたとともに～

年末の風物詩として有名なベートーヴェンの交響曲第9番《合唱付》（通称「第九」）。

「歓喜の歌」のメロディは有名ですが、実は「苦難を乗り越えた先にある喜び」や「世界中の人が手を取り合おう」という、熱いメッセージが込められた曲です。

このプリントでは、第九をより身近に、そして面白く聴いていただくために、ベートーヴェンの驚きのエピソードや曲の秘密をご紹介します！



偉人!? ベートーヴェンって、実はどんな人？

“楽聖”と呼ばれるベートーヴェン。でも、その素顔はとても情熱的で、人間味あふれる人物だったと言われています。まずは、そんなベートーヴェンの人柄を示すエピソードをご紹介します。

聴力を失っても生き抜いた情熱

20代後半から耳が聴こえづらくなり、30代で生活に支障が出るほどに。自殺を考えるほどの絶望を強い精神力で乗り越え、数々の歴史的名曲を生み出しました。

宮廷や貴族に雇われるのではなく、現代に通じる「フリー作曲家」の生き方を切り開き、作品を売り込み、お金を稼ぎながら強く生きたパイオニアでもありました。

天才！ だけど生活力はゼロ！？

作曲に集中すると周りが見えなくなり、部屋には書きかけの楽譜と食べかけのスープが散乱。ボロボロの服で散歩をしてホームレスと間違われ、警察に連行されたという笑えない実話も残っています。

それほどの集中力の持ち主だったからこそ、数多くの名曲を生み出せたのかもしれませんね。

短気！ だけど寂しがり屋‥‥

友人と口論になって激怒の手紙を送りつけたかと思えば、数日後には「言い過ぎた、許してくれ…」と泣きつくような、情熱的で人間くさい性格でした。

生涯で何度も身分違いの激しい恋と失恋をした「恋多き男」でもありました。有名な「エリーゼのために」も、これらの失恋の中から生まれたと言われています。

引越し魔、そしてコーヒー60粒のこだわり

気に入らないとすぐ部屋を飛び出し、生涯で60回近くもお引越し。また、コーヒーは毎回自分で必ず「きっちり60粒」の豆を数えて淹れ、スープの出来栄えにはうるさく、外食ではお気に入りのメニューを毎日でもリピートする、強烈なこだわり屋でした。

➡ 裏面へつづく：『第九』に込められた、時を超えるメッセージとは？

「第九」に込められた想い

「第九」の歌詞のほとんどは、文豪シラーの詩「歓喜に寄す」から取られています。ベートーヴェンがこの詩に出会ったのは 22 歳の頃。それから約 30 年もの間、大切に構想を温め続け、53 歳でついに「第九」を完成させました。

当時、交響曲に「人間の歌声」を取り入れることは、誰もやったことのない大きな挑戦でした。苦難に満ちたオーケストラの演奏を経て、第 4 楽章で突如として響き渡る人の声―。そこには「分断や対立があっても、歓びを共にすることで人はひとつになれる」という、力強いメッセージが込められています。

初演は大成功を収めましたが、すでに完全に耳が聴こえなくなっていたベートーヴェンは、演奏が終わっても観客の熱狂的な拍手に気づけず、歌手に肩を抱えられて初めて客席の感動を知った‥‥という切なくも温かいエピソードも残っています。

200年を超えて、今あなたへ届けたい

初演から 200 年以上が経った今も、世界や私たちの身近な社会には様々な対立や分断が存在しています。だからこそ、年末に今年 1 年を振り返り、生の音楽と合唱の迫力を通して「歓び」を共有することには大きな意味があります。

ホール全体を包み込む壮大なオーケストラと合唱のエネルギーを、ぜひ会場で体感してください。皆様のご来場を心よりお待ちしております！

京都「第九」をうたう会
京都新音楽協会ミューズ

シラーの詩の意味と第九のメッセージ

ベートーヴェンが生涯をかけて音楽にしようと温め続けた詩「歓喜に寄す」。彼がこれほどまでにこの詩にこだわった背景には、当時の激動の社会情勢がありました。

ベートーヴェンが生きた時代、世の中はフランス革命を経て古い階級社会が崩壊した一方で、新たな社会の主役となった市民たちの間に、従来とは違う形での葛藤や対立（分断）が生まれ始めていました。ベートーヴェンはフランス革命が掲げた「自由・平等・博愛」の精神に深く共感しながらも、対立しあう人々の姿に直面します。そして「第九」を通じて、ひとつのメッセージを発したのです。「分断された人々も、歓びを共にすることでひとつの家族（兄弟）になれる」と。

自分の幸せだけでなく、誰かの歓びを我がことのように喜び合える社会へ。「第九」は、ベートーヴェンが描いた理想の世界の姿そのものなのです。

歌詞の意味は様々な書籍やウェブサイトで紹介されていますが、一部をご紹介します。

歓喜よ！ 神のすばらしいひらめきよ！
楽園からつかわされた乙女よ！
我らは情熱に酔い、
天のその聖なる場所に足を踏み入れる。
汝の魔力は、
時代の流れに強く引き裂かれた者たちを
再び結び付ける。
その柔らかな翼のもとで
すべての人々が兄弟になるのだ。

抱き合え、諸人よ！
この口づけを全世界に！